

結末を知らない物語

中沢 央

男は、何も視界に映していないような暗い瞳をしていた。

女性が虜になりそうなほどの美男子なのに、その顔がかえって男の暗い雰囲気強調させていた。

「どうだ？ 私のもとで働かないか？」

男の瞳が微かに動いたのを、サルデンは見逃さなかった。この男に選択肢は無いはずだ。

「私は、サルデン||リグレー。私のもとで働いてくれるなら、今すぐこの監獄から出してやろう」

「何が目的ですか？」

サルデンは口角を上げた。差し出された餌に食いつかない犬はいないだろう。

「それは私の屋敷についてから話そう」

「……私はただの罪人です。貴方の役に立つことはできません」

「——お前は優れた役者らしいな」

サルデンの言葉に、目の前の男は、やっと人間らしい顔になった。

「よく考えてみる。この監獄から出たとして、ソレがある以上ろくな職に就くこともできない。人々はお前を迫害し、お前はまた罪を重ねることになる。——だとした

ら、私に仕えた方が良いだろう。——私は、お前の演技力が欲しいのだ」

サルデンは手を差し出した。

男は、差し伸べられた好機を手に取った。男の右手首には、罪人の証である入れ墨が見えていた。

\*

フェニールが主のもとに戻ったのは、日が落ち始めた頃だった。

「サルデン様にお取次ぎを」

執事は横柄に頷くと、主の部屋の扉を叩いた。

「フェニールが戻りました」

「——入れ」

主の許可が聞こえると、フェニールは扉を開いた。

サルデンは書類に目を通して最中だった。入ってきた家令に目もくれず、書類を読み続けている。

「——先ほど戻りました」

フェニールが一礼しながら口を開くと、やっとサルデンは視線を移した。

「どうだった？」

「テイモールと接触できました」

テイモールは、タートス伯のお抱え商人だ。

「嘘の市場動向を伝えました。……あとは、相手がどう

出るかです」

フェニールの報告を受け、サルデンは頷いた。

「下がって良い」

フェニールは一礼すると、主の部屋を後にした。

自室に戻る途中で、前方から見知った顔が近づいてくるのが見えた。

伶俐そうに弧を描く眉に通った鼻筋、耳より高い位置で縛れるほど長い髪。フェニールと同じくサルデンに仕えているアウヴィスだ。

アウヴィスはフェニールに気づくと、笑みを浮かべた。

「やあ、いつの間に戻ってきたんだ？」

「さっきだよ」

フェニールは表情を変えことなく答えた。

「サルデン様に報告は？」

「してきた。部屋に戻る途中なんだ」

足を進めようとしたフェニールをアウヴィスが右手で制した。

「私も今日は非番なんだ」

フェニールは感情のない目を向けた。

「そうなんだ」

「で、カーリーナも今は非番だ」

アウヴィスが言いたいことが分かったような気がした。

「つまり？」

「飲みに行こう！」

予想が当たった。

「私は疲れているよ」

「いやいや三人揃って非番なんて滅多にないじゃないか！ 睡眠よりも店でパーツと楽しんだ方が疲れも取れるぞ」

そこでやっとフェニールは苦笑を浮かべた。正確な年齢は知らないが、おそらくアウヴィスは二十代だろう。三十になって二十代の頃より体力が落ちたことを実感しているフェニールの気持ちは知らないのだ。

「私は君ほど若くないから」

「何言ってるんだ、私より年下のくせに」

「え」

驚いたフェニールが次の言葉を継ぐ前に、アウヴィスはもう一人の仲間を見つけた。

「カーリーナ！」

編み込みが入った髪を、うなじで一つの団子状に縛った女性がこちらに視線を向けた。

カーリーナは仲間の姿を認めると、微笑を浮かべながら近づいてきた。

「あら、フェニール。いつ戻ってきたの？」

「さっきだよ」

「なあ、カーリーナ。私たち三人共珍しく非番なんだ。飲みに行こうぜ」

カーリーナは目を輝かせた。

「良いわね！　どこで飲むのかしら？」

「フェニールの部屋」

「は！？」

フェニールはアウヴィスの肩を掴んだ。

「何勝手に決めてるの？」

「君は自室で休めるし、私たちは酒を楽しめる。何も不都合はないじゃないか」

「酔っ払いが二人いてゆっくり休めるわけないだろ」

「私はフェニールと飲みたい」

アウヴィスは両手の拳を顎の下にやって、小首を傾げた。成人男性——しかも三十代の可能性がある——がそのような動きをしてもおぞましいだけだ。

「よほど疲れてるなら無理は言わないけど、せっかくだからお酒の力を借りながら愚痴を言いましょよ。——任務の愚痴は私たち三人しか言えないのだから」

カーリーナの言葉に、フェニールは口をつぐんだ。仕事の鬱憤を話せるのは、カーリーナとアウヴィスだけだ。

「わかった、二人とも上等な酒を持って私の部屋に来たまえ」

「待ってる、貯金して買った年代ものの果実酒を持って行くよ」

アウヴィスがおどけたように言った。

「夕餉は食べた？　食べてないなら軽食でも持って行くわ」

「まだ食べてない」

「分かったわ、厨房で何か貰えないか聞いてくる」

そう言うと、カーリーナは厨房へ向かって小走りに去っていった。

「じゃ、私たちは部屋へ向かうとするか」

フェニールとアウヴィスの部屋は近い。

二人は揃って歩き始めた。

「いやあ、三人揃っての非番なんて本当に久しぶりだなあ！　フェニールも私と飲めて嬉しいだろ？」

アウヴィスは楽しくて仕方ないように笑った。

「そういうことしておくよ」

アウヴィスはああ言っているが、フェニールたちは互いの出自も本名さえも知らない。仲間であるのは間違いないが、信頼できる味方かと聞かれると同意できない。

「じゃ、また後でな」

自室に着くと、フェニールは燭台に火を点けた。

ベッドと小さなテーブルと椅子が一つずつ。他の使用人と大差ない小さな部屋だ。外套を脱ぐと、ベッドの端に掛けた。久方ぶりに主を迎え入れる部屋は、埃が溜まっていた。

やはり、自分の部屋で酒盛りをするべきではなかったのではないのかと考え始めた時、扉が叩く音が聞こえて

きた。

「どうぞ」

先に部屋に来たのはアウヴェイスだった。

「ほら、上等な酒だろう！」

アウヴェイスが差し出した酒の銘柄は、フェニールも一度だけ飲んだことがあるものだった。

「高かっただろ、これ。独り占めしなくて良いのかい？」

「気にするな。せっかくだらうまい酒なんだ、誰かと飲んだ方が、この酒も喜ぶだろ」

アウヴェイスは左手を軽く持ち上げた。

「念のためグラスも持ってきたが」

「気が利くな。二つしかないから助かるよ」

アウヴェイスは小さなテーブルに自身が持ってきたグラスを置いた。

「先に始めるのはカリーナに悪いからな」

言いながら、アウヴェイスは椅子に腰かけた。必然的にフェニールはベッドに座ることになる。

「テイモールとは接触できたのか？」

「ああ」

今回の任務は、タートス伯の財力を削減するのが目的だった。相手の信頼を勝ち取り、嘘の情報を流すだけの任務だったが、長期間知らない土地で商人に成りすますのは、なかなか大変だった。

「今回は結構長かったな」

「ああ。でも、今回は人を殺さなくて済んだ」

思わず低い声で言ってから、フェニールは自分の失言に気づいた。

アウヴェイスは、暗殺者としての一面を持っている。

「そうだな」

表情は無くとも、アウヴェイスの声には哀しみが込められていた。

扉が叩く音がした。

「どうぞ」

カリーナが、布に包まれたものを抱えながら入ってきた。

「黒パンとチーズしか貰えなかったわ」

「ありがとう。十分だよ」

お礼を言いながら、フェニールは黒パンを手を取った。隣に座ったカリーナから、何かの花のような香りがした。燭台に照らされたカリーナの横顔が、ひどく艶っぽく見える。

物静かそうな顔をしているのに、カリーナは——任務から帰ってきた直後は特に——蠱惑的な魅力を持っている。しかし、彼女には常に、隠しきれない哀愁を漂っている。彼女の哀しみが伝わってくるようで、フェニールはカリーナに対し一種の願望を抱いたことがなかった。カリーナがどのような手を使って諜報を行っているか、アウヴェイスもフェニールも感づいているし、カリ

ナもそのことに気づいているはずだ。

アウヴェイスがカーリーナに酒の入ったグラスを差し出した。

「どうぞ」

「ありがとう」

「おっと、まだ飲まないでくれよ。せっかくだ、乾杯しようぜ」

グラスが触れ合う音がする。

「さて、私もただこうかな」

アウヴェイスはチーズを手に取ると、一口で食べてしまった。

アウヴェイスは常に、指先が覆われていないグローブをつけている。食事をする時でさえ外さないから、フェニールは、アウヴェイスが異常な綺麗好きなのだと思っていた。しかし、綺麗好きなら最も汚れやすい指先を覆うだろうし、他人の血がつくような仕事など耐えられないだろう。アウヴェイスは、手はおろか、どんなに暑い日でもえ肌を露出するのを避けているようだった。おそらく、彼の手には傷か何かがあるのだろう。

フェニールも人のことは言えない。夏るときでさえ、フェニールは人前で腕をまくることは無い。

カーリーナはグラスを傾けながら尋ねた。

「任務は上手くいったの？」

「いったと思いたいな。ちゃんと相手に損失を与えられ

ればいいんだが」

アウヴェイスはグラスに残っていた酒を飲みほした。

「まあ、大丈夫じゃないか？ いちいち気にしていたら、やっていけないからな」

アウヴェイスが果実酒をグラスに注ぎこむ。自分が持ってきたものだからか、遠慮がない。

「次は私の番だろうな」

任務の話だ。アウヴェイスの言葉には何の感情もこもっていなかった。彼の青い瞳からも、感情は読み取れない。

「これが三人で飲む最後の晩酌になるかもしれない」

アウヴェイスは、家来の命が主の機嫌や言動で簡単に消えることを知っていた。

「お墓には、この酒を供えればいいかしら？」

「ああ」

アウヴェイスは嘯いた。本当は、酒なんぞより欲しいものがある。

「美人にお酌してもらえるなら、あの世で喜んでしまいな」

サルデンは自室で果実酒に舌鼓を打っていた。

サルデンは三枚の札を持っている。

「大団円など、物語の中にしか存在しない」

サルデンは果実酒を口に含むと、面白そうに口角を上

げた。

一人は、豪胆さと優れた演技力を持つ役者。男は、優れた役者だった。美しい容姿と類まれな演技力で観客を魅了した。しかし、たった一つの過ちと嘘の証言で男は職も財産も失った。

もう一人は、数多の男を魅了する娼婦。女は幼い頃孤児になった。年端も行かぬうちから男の相手をして生きてきた。サルデンの提示した条件を女は飲んだ。自分の身体を使うことに変わりはないが、娼館で働くよりも待遇が良かったからだ。

そして、優秀な頭脳と立派な出自を持つ貴公子。男は、ある伯爵の嫡子だった。政権争いに巻き込まれ、父は処刑。母は自死、妻とは離縁することになった。男に残されたのは、拷問で傷ついた体と、下層階級という下賤な位だけだ。

三人とも、人生のどん底を経験している。絶望を味わった人間は、倫理観が麻痺してしまう。

扱いを間違えれば、自分の首が危ういことは分かっていたが、サルデンはあの三人の僕を飼い慣らす自信があった。

(続く)